

第7回・同志社大学グローバル地域文化学会・学術講演会

「いま、ここにあるグローバル——
日本から考える多文化共生／難民支援」

日時：2019年11月5日（火）17：00～19：00

場所：同志社大学烏丸キャンパス志高館110教室

主催：同志社大学グローバル地域文化学会

企画・運営：2019年度GR学会・学術講演会実行委員会

発言者（登場順）

竹内文香（グローバル地域文化学部・アメリカコース1回生）

小久保玖美（グローバル地域文化学部・ヨーロッパコース3回生）

清水穰（GR学会長／グローバル地域文化学部学部長）

安達智史（近畿大学総合社会学部准教授）

橋本直子（一橋大学社会学研究科准教授）

中島咲寧（グローバル地域文化学部・アジア太平洋コース3回生）

鈴木縁（グローバル地域文化学部・ヨーロッパコース4回生）

向川明希（グローバル地域文化学部・ヨーロッパコース1回生）

森友花（グローバル地域文化学部・アメリカコース3回生）

太田夏海（グローバル地域文化学部・アメリカコース4回生）

開 会 の 辞

竹内 第7回GR学会「いま、ここにあるグローバル——日本から考える
他文化共生／難民支援」学術講演会を始めさせていただきます。司会は
グローバル地域文化学部アメリカコースの竹内文香です。

小久保 同じくグローバル地域文化学部ヨーロッパコースの小久保玖美で
す。

竹内 今回の学術講演会は、GR学部の教員と学部生からなるGR学会実行
委員会が企画運営を行なっています。趣旨は、GR学会の会員が、「いま、
ここ」にある問題として「多文化共生と難民支援」について全員で討議し
ていくことです。専門家を二人、お招きしています。ひとは近畿大学総
合社会学部准教授の安達智史先生です。先生は現在、「イギリスにおける
ムスリムの社会統合」をご専門とされています。もうひとは、一橋大学
社会学研究科准教授の橋本直子先生です。「国際難民法」「移民法」「共生
移民学」「国際人権法」などをご専門とされています。それではGR学会
長、清水穰先生から開会の辞をお願いします。

清水 本日は当学会の学術講演会にお越しいただき、嬉しく思います。本年
度は新しい試みとして、学会の会員である本学部の学生たちにも企画の段
階から携わってもらいました。結果、アクチュアルな、面白い講演会にな
るということで、学会長として学部長としての私も非常に期待しておりま
す。私たちの試みに参加してくださった安達先生と橋本先生、ありがとう
ございます。「移民」「難民」「イスラームとの共生」の問題は、今や一部
の問題ではなく、今日の社会の根本的な問題であると思います。専門も問
わないくらい普遍的な問題になっているのではないかと実感しています。
私の専門は現代美術ですが、この分野においてもポスト・コロニアル批評

の登場以降、socially engaged artとしてこういった問題を取り扱う現代美術の作家がメインストリームになっているくらいで、現代美術の専門家としても今日は勉強しに来ました。専門を問わず、こういう問題は横断的に現れるということを学生たちが着目してくれたのだなと思って楽しみにしています。アクチュアルなテーマについて、皆さんとアクチュアルな討議の場にしたいと思っていますので、ぜひ最後までおつきあいください。それではただいまから第7回GR学会を開幕いたします。

竹内 ありがとうございます。本日の進め方ですが、まずゲストの先生方からご自身のテーマについて話していただき、その後、質疑応答に移ります。QRコードの質疑応答も含めていますので、みなさん、オンラインでの質問の投稿をお願いします。紙の質問は休憩時間中に回収させていただきます。それでは安達智史先生からよろしく願いいたします。

「イスラームを人間化する—— イギリスのムスリム女性のヒジャブとシティズンシップ」

安 達 智 史

本日は「イスラームを人間化する——イギリスのムスリム女性のヒジャブとシティズンシップ」という内容で報告させていただきます。私は、風光明媚な京都の田舎で生まれ育ち、その後、横浜、草津、京都、仙台、イギリスのコヴェントリー、名古屋、ロンドン、大阪、マレーシアのクアラルンプールを経て、現在、花園ラグビー場のある東大阪の近畿大学で働いています。他にも色々な活動をしており、「Yahoo!ニュース個人」のオーサーとして、専門的な記事を寄稿したり、その他の記事にコメントをおこなったりしています。また、外国にルーツをもつ子どもの支援団体を立ち上げたりもしました。主著は『リベラル・ナショナリズムと多文化主義——イギリスの社会統合とムスリム』となっておりますが、来年からは『再帰的近代のアイ

デンティティ論——ポスト9・11時代におけるイギリスの移民二世代ムスリム』が刊行され、それが主著になる予定です。今日はその内容のごく一部をお話させていただく予定です。報告を興味深く思っただけならば、来年、本を手にとっただけだと幸いです。

私の報告の課題は、「西洋社会のシティズンシップや民主主義的価値とイスラームの教義・実践の関係」にあります。そこで、「イギリスのムスリム女性は、民主主義的価値とイスラームとをどのように両立可能なものとして呈示しているのか」、そして「多文化主義はムスリムの統合を阻害するのか、それとも逆に促進するのか」、という点について話をいたします。

以下では、次の順序で話をおこなっていきます。まず第一に、イギリス社会は「多文化社会」であると同時に、「多文化主義社会」であること。第二に、多文化主義社会でムスリム女性たちは宗教的知識を獲得する環境にあり、それがイスラームとの積極的な関係を築くことを可能にしていること。第三に、そうした知識を用いながら、イギリスの価値とイスラームとを両立させていること。そして第四に、「ヒジャブ」にフォーカスを当てつつ、西洋社会のムスリム女性の信仰と社会への参加の関係について説明します。

ここでの議論が対象とするのは、インド、パキスタン、バングラデシュ系、いわゆる南アジア系と呼ばれるグループです。南アジア系は、イギリスのムスリムのマジョリティを構成するグループです。また彼女／彼らは、移民二世代—ここには小さい頃にイギリスにきた1.5世代も含まれています—のムスリム女性です。この2点を押さえておいていただければと思います。

では、そうしたムスリム女性たちが生活する、イギリスとはいかなる社会か。まずおさえておかないといけない点は、多民族国家という側面です。ラグビーの世界カップのチームを見てみるとイングランド、ウェールズ、スコットランド、(北)アイルランドというように、イギリスを構成しているサブネーションが、すべて出場しています。それに対して、「イギリス」チームはなかったわけです。サッカーも同じです。サッカーで「イギリス」がチームとして出場したのはロンドン・オリンピックだけでした。イギリスは、多民族国家なわけです。宗教もカソリックとプロテスタントの違いが

あつたりします。もう一つは、「多エスニック国家」である点です。イギリスには、エスニック・グループがたくさんいますが、それは、大英帝国の歴史に基づくものです。かつてイギリスは多くの植民地をもっていました、そのつながりのなかでイギリスに多くの人たちがやってきたのです。特にインドは大英帝国の礎を築いた地域であり、そこからバングラデシュ、パキスタンといった旧インド領のムスリムがたくさんイギリスにきています。特に90年代以降、イギリスでは「純移民」の数が増えていきました。その結果、1991年、「白人系」とカテゴライズされる人たちは94%いましたが、20年後になると90%を切ってしまいました。宗教の観点からみると「無宗教化」あるいは「脱宗教化」が進んでいるといえます。「脱宗教化」はどこから進んでいくかという、キリスト教からです。それに対してムスリム・コミュニティは増え続けています。10年ごとに1.5倍ずつ増えています。マイノリティ宗教の中でもムスリムは多く、人口の5%以上を占めているわけです。その伸び率は、他の宗教に比べても高くなっています。こうした点が、ある種、西欧社会においてイスラームに対する恐怖を呼び込む背景になっています。宗教実践を見ても、キリスト教の33%が「宗教実践に従事している」と答えているのに対して、ムスリムでは80%がそうした実践をおこなっていると答えています。

イギリスは「多文化社会」であるということですが、それだけではなく、「多文化主義社会」ともいえます。政策という面から多文化主義をはかるデータがあります。それによると、カナダやオーストラリアなど伝統的な移民国で、そのポイントはもっとも高くなっています。ヨーロッパではイギリスが高く、「ライシテ」という固有の政教分離をとっているフランスと比べると、多文化主義的政策をより多く実施している国と言えるでしょう。ちなみに、日本は0ポイントというのが現状です。イギリスの多文化主義の特徴として、反人種主義があげられます。イギリスでは、「間接的差別」の禁止、つまり意図してはいないが、何らかの差別になる制度や慣行が、法律によって禁じられています。これは、多様な集団を包摂するために重要な役割を演じるものです。また、先行する集団の権利への参照を通じた、漸次的な権利の拡張という伝統があります。たとえば、法律によってカソリック教徒やユ

ダヤ教徒にある権利が与えられたならば、ムスリムや他の宗教集団にも、その法律に言及することで同様の権利が拡張されるという伝統があります。結果、イスラームの宗教学校が公的資金を得たり、公立学校でハラール・フーズが提供されたり、ヴェールを公共場面で被ったりもできるようになっているわけです。

そういう「多文化社会」「多文化主義社会」の中でインタビューをおこなっていると、「ムスリムにとってイギリスは居心地の良い社会である」といった回答を得ます。なぜかという、「他のヨーロッパの国に比べて寛容で、宗教的实践をおこなうことができる」、つまり「多文化主義社会」だと認識されているからです。「他のヨーロッパと比べて」と述べる時、どの国が念頭にあるかというフランスです。彼女たちは、ライシテという政教分離をとっているフランスと比べます。「学校でのスカーフ着用や公共場面のヴェール着用が禁じられているフランスに比べると、イギリスは良いよね」というように。そういう意見があるわけです。ただ問題となっているのは、そうした多文化主義空間で宗教的慣行がおこなわれる結果、そのなかにいる女性たちが抑圧されているという言説をどのように考えるかという点です。

この問題を考えるとき、イスラームと女性たちの関係（の変化）に注目する必要があります。しばしば指摘されるのは、昨今の若い世代が宗教をめぐる学習コースを受けたり、自身でイスラームの本を読んだりしているという点です。若い世代は外に出て、イスラーム教育を受け、自分の宗教について調べ、よく学んでいます。というのも宗教的インフラが充実し、各地にモスクが置かれ、その付近にイスラームの専門書店があり、またアラビア語の初級・中級・上級講座、あるいは私的な学習サークルなどが組織されているからです。こうした色々なテーマの講座があって、知識を得ることができるのです。知識を得ることで、今の若い人たちは自分自身で、クルアーンのような宗教的テキストを読解し、独立した探求や推論をおこなっています。「独立した探究」はイスラームにとってとても重要な概念で、「イジュティハード」と呼ばれています。あらゆる宗教がそうですが、イスラームには信仰の軸となる聖典があります。ですが聖典は1500年前とか2000年前に書かれてお

り、それを現代の社会に適應するためには解釈という実践が重要になります。時代が違うため、それぞれの社会で宗教を有意味なものとするためには、解釈が必要なのです。従来、そうした解釈実践をおこなっていたのが、男性の宗教家でした。というのも、アラビア語や宗教的言語をめぐるリテラシーをもつのは、エリートだけだったためです。そもそも一般の人々の識字率が高まるのは近代以降、とくにイスラーム圏では、せいぜいここ数十年のレベルの話です。それまでは、男性の宗教的エリートが解釈し、一般の人たちはローカルな慣習に従うか、そうしたエリートの意見を聞くしかなかったわけです。しかし、イギリスにいるムスリムは、リテラシーや読み書き能力が高いのです。アラビア語を読める人もいるし、読めなくても英語の能力がある。イギリスの教育水準は高いので、色々なテキストを英語で読むことができます。そうやってイスラームの聖典に何が書いてあったのかを知り、どんな解釈が妥当なのかを、自分自身で決めるわけです。ムスリム女性は自分たちの生活に根ざしたイスラーム解釈を、様々な知識や情報源に当たりながら解釈することができるのです。「Humanizing the Sacred」、つまり「聖なるものを人間化する」プロセスが、今、可能になっているわけです。これは決定的に重要な点です。そうした実践は、「多文化主義」社会において、知識を簡単に手に入れる環境があることによって可能になるのです。

さて、ここまでの議論は、本報告の前提となっています。それを踏まえた上で、イギリスのムスリム彼女たちが、そうした知識を使ってイギリス社会への参加や統合をどのようにおこなっているのかについてみていきます。そのために「ヒジャブ」をめぐる、女性たちの考え方についてみていきます。

「ヒジャブ」とは何かというと、もともとは「隠す」とか「覆う」「隔てる」「敷居」「カーテン」などを意味する言葉でした。そのため、必ずしも女性が着用するスカーフそのものを意味のものではありませんでした。ただ慣習上、スカーフやヴェールといったムスリム女性が頭に着用する衣装を、「ヒジャブ」と呼びます。なぜヒジャブがヨーロッパ社会で問題化するかというと、それがある種の「抑圧の象徴」と認識されているからです。「ヒジャブ着用は、父親や夫によって強いられたものである」という言説が、

ヨーロッパにあるわけです。そうした支配的言説のなかにある移民二世代のムスリム女性にとって、ヒジャブをイギリス社会というコンテキストの中で正当化することは重要な課題となっています。彼女たちは、「ムスリムでありたい」、「ムスリムとしてポジティブなアイデンティティをもちたい」と思っているわけですが、そのためにはより広い社会からの受容や承認が必要です。したがって彼女たちは、単に「イスラームではこう考えているよ」と主張するだけではだめなわけです。それだけだと、「イスラームと西欧社会の文化は異なっている」とか「(あなたたち)イスラームの慣行や価値は、(私たちの)民主主義的価値と相容れない」といわれ、市民社会から排除されるわけです。だからこそ、イギリス社会の枠内で、いかにイスラームやヒジャブを正当化するのが、西洋社会に生まれた移民二世代ムスリムの共通の課題になっているわけです。

同様に、「ヒジャブを着用しないこと」、これもまた重要です。ヨーロッパでは、多文化主義に対して多くの批判がありますが、それは文化が、「一部の男性エリートによる、女性抑圧の正当化のツール」ととらえられているからです。たとえば、ヒジャブ着用を「多文化主義だから承認しろ」といった時、「じゃあ、着用したくない女性はどうなるの」という疑問が生じるわけです。つまり、「多文化主義のもとで、シティズンシップや女性の権利は守られるのか」という、フェミニズムによる批判がでてくるわけです。そのため、自身のコミュニティの中で、多様性をどう担保するのが課題となるわけです。「ヒジャブを着用しないことを、どのようにイスラームの枠内で説明しうるのか」。これもまた、移民二世代のムスリム女性たちのイギリス社会への適応にとって重要な問いなのです。

まずは前者についてお話ししたいと思います。彼女たちは、ヒジャブをどのように意味づけているのか。それは、「シンボル」として認識されています。「身分証明書」、「自分自身がムスリムであることを表すもの」、あるいは「ムスリム女性であることを、自身および他者に識別させるもの」というように。では、「ムスリム女性であること」とは、どのような事態を意味するのでしょうか。それは、身体に関する「慎み深さ」を表すものだととらえられています。ムスリムの女男は互いに適切な空間的距離を保つことが求めら

れていますが、そうした距離の維持こそが「慎み深さ」を表すものなのです。ヒジャブがあれば、男性と適切な距離を保つことができる、と。では「ヒジャブ」を着用していない時はどうなのか。その際、いくらかのインフォーマントは、自分自身を「安っぽく感じる」と答えています。「意味のない、体だけの存在」だと。「ヒジャブ」を着用していない時、男性に気軽に声をかけられたり、周囲から見た目で判断されるからです。逆に「ヒジャブ」を着用すると、見た目によって判断されず、述べていること、おこなっていることによって判断されるようになる、つまり自身を尊敬をもって扱ってくれると感じることができるのです。こうしたヒジャブの利点は、しばしば西洋社会に蔓延するセクシズムに向けられています。「チョコレートを売りたいなら、裸の女性を見せる必要がある」という発言にみるように、西洋社会で女性は、能力ではなく、容姿によって序列化されてしまう。それに対して、ヒジャブを着用すれば、見た目に惑わされず、自身の能力や考え方によって判断されるというのです。これは、女性の「自尊心」ともかかわってくる点です。

ヒジャブ着用の意味についてもう一つ重要なのが、「自律」という点です。「ヒジャブをすれば自律性が高まる」という発想があるわけです。あるインフォーマントは、若い頃、ファッションに凝っていました。彼女は、ファッションを気にかけることを、自らが望むことだと感じていました。しかし後に、そうした関心は、他者の期待を内面化していたもの、つまり周りにコントロールされていたことだと気づくわけです。仲間うちの女性や男性の評価を気にして、自分自身といったものが失われていた、と。それに対して、ヒジャブを着用することで、周りの目を気にしなくなり、そうした不毛な競争に巻き込まれなくなった、と。結果、今、自分がすべきこと、勉強とか、キャリアを積むこと、そういうことにフォーカスを当てるようになったと述べているわけです。

女性の「自律」は、「神」によって媒介されたものであるという点は重要です。彼女たちは、「誰かのためにスカーフを被るのではない。神さまのために着用している」「神さまはスカーフ着用を命じていて、自分はムスリムとして、神さまを喜ばせるためにやっている」、そう考えるわけです。

このことは何を意味するのでしょうか。エジプトの現代ムスリム女性の研究をおこなっている後藤絵美の表現を借りれば、「神のためにまとう」というロジックを用いことで、自身の身体の管轄権を主張しているのです。ここで「神」は、女性の選択を正当化するための根拠として呈示され、それが他の誰か（ex. 父、夫、友人たち）の影響によるものではない点を主張するものとなっているのです。

このようにヒジャブ着用は、セクシズムやそれに結びつく商業主義の搾取に対する防波堤であると同時に、能力による評価や女性の自律という近代的価値をまさに実現するものとしてとらえられているのです。

さて、ヒジャブをめぐるもう一つの点、つまり「ヒジャブを着用しないこと」の正当化という問題について説明します。いく人かのインフォーマントは、コミュニティのなかでヒジャブ着用をめぐるピアプレッシャーや、母親によって一父親というケースはありませんでしたが—スカーフの着用が強制されたと報告していました。ただ、インフォーマント自身は、ヒジャブを着用しない人に対して、ネガティブな評価をおこなっていませんでした。その理由は、ヒジャブを着用している人が、良くない振る舞い—たとえばお酒を飲むとか、夜に男性とでかけるとか—をおこなっている事例を知っているからです。

彼女たちは、それを「外面／内面」という表現で説明しています。「表紙によってその本の善し悪しを判断できない。それと同じで人間も、ヒジャブをしているからその人が善い人だとか、していないから悪い人だとかいえない」、と。あるインフォーマントは、イスラームには、「外なるヴェール」と「内なるヴェール」という考え方があると述べています。内なるヴェールというのは、「スカーフをしていなくても私は1日5回、お祈りをしている。神さまのことを考えている。スカーフをしてなくても私は慎み深いの」という発言にみるように、内面の純粹性を重視することです。たとえば、互いに礼儀正しく振る舞うとか、心が清らかであるとか、礼節をもって人と接するとか、良き意図をもつとか、そういう点を重視することです。

スカーフ未着用と関係し、もう一つ重要なのが「定命」という考え方です。それは、「六信五行」の一つで、イスラームにとってとても重要な教え

の一つです。定命とは、神はあらゆるすべてを決定し、コントロールしている。人間の行く末も決めている、という考えです。しかし他方で、神は人間に自由意志を与えたという考えも含意しています。神は何でも知っている、コントロールできるけど、それは個人の決定に影響しない。神はどんな力をもっていたとしても、個人に強制しない、ということです。神は「道を示したもうた」、つまりどうすれば天国にいけるのか、どうすれば地獄に行くのか、その条件について提示してくれている。でも、それに従うか否かは、あなた次第ということです。こうした考え方を、イスラームでは「運命の獲得論」と呼びます。

この点を表しているのが、「アダムとイヴ」のエピソード、つまり「楽園喪失」です。神さまに「知恵の実を食べちゃいけませんよ」とアダムはいわれる。けれどもアダムは、蛇に騙され、知恵の実を食べてしまい、結果、楽園を追い出されてしまう。このエピソードは、イスラームでは次のように解釈されます。知恵の実の禁止は、神さまによる「試練 (test)」だと。それはアダムに与えられた試練であったが、結果的に試練を乗り越えられなかった。それは、人間の自由意志の結果なわけです。知恵の実は、人間の意志をためす試練のシンボルなわけです。では、試練とは何か。試練とは「テスト」のことです。これは、ここにおられる学生の方々にはおなじみの考えだと思います。みなさんは、テストをパスしなければなりません。そして、教員はまさに神の如く、みなさんにテスト、つまり試練を課すわけです。その際、教員は、どうすれば単位をとれるか、つまり永遠の天国にいけるか、落第するのか、つまり永遠の地獄へいくのか、そうした道を指し示すわけです。みなさんは、テストにパスするために、準備をする必要があるわけです。

しかし我々とイスラームと何が違うか。学校では、いつテストがあるかわかっています。それに対して、イスラームの場合、常に試練が課されているわけです。そして試練を乗り越えるためには、「準備」が必要です。大学のテストにおいて、準備しなければならぬ時期は決まっていますが、常に試練が課されているムスリムにとって、その準備は個人のタイミングによってなされることとなります。つまり、「準備ができたときに、試練に挑む」と

いうわけです。逆にいうならば、「まだ準備ができていないから、今はまだ試練に挑めない（のもしょうがない）」、という発想が可能なのです。多くのインフォーマントは、「今は準備ができてないけど、準備ができればそうするわ」と発言しています。これは、ある種のモラトリアム、つまりイスラームの義務履行の延長を正当化するためのロジックを示すものとなっています。その義務の中には、スカーフの着用が含まれているのです。

結論にいきたいと思います。本報告で述べたかったことは、イギリスの多文化主義が、宗教的知識の探究を促進する環境を整え、その結果、女性が自らの手でイスラームを解釈し、イスラームを自分のものにする、つまり「人間化」することを可能としているという点です。つまり、イスラームを、どこか外から与えられた、生き方を拘束するものとしてではなく、解釈を通じて自らの生活と関連あるものとして設えることで、柔軟な運用を可能にしているのです。そうしたイスラームは、自尊心、自律、社会参加といった西洋社会の価値やシティズンシップと対立するものではなく、その多くの部分を共有するものとなっています。まとめると、イギリスの移民二世世代の女性たちは、多文化主義的空間のなかで宗教的知識を獲得し、そうした知識への積極的な言及を通じてイスラームを自身の生活と関連あるものに再解釈することで、西洋社会への統合を実現しているということです。

長くなりましたが、ご清聴ありがとうございます。

竹内 安達先生、ありがとうございました。それでは橋本先生、よろしくお願ひします。

「難民受け入れの現状と課題—世界と日本」

橋 本 直 子

「難民受け入れの現状と課題——世界と日本」について、みなさんと質疑応答を含めながらお話をします。クイズも入れたいと思います。

早速ですが、質問です。「難民とは？」。6択です。A「迫害を逃れ、国外にいる人」。B「迫害や紛争を逃れ国外にいる人」。C「迫害や紛争、テロを逃れ国外にいる人」。D「迫害や紛争、テロ、自然災害を逃れ国外にいる人」。E「迫害や紛争、テロ、災害、貧困を逃れ国外にいる人」。F「迫害、紛争、テロ、自然災害、貧困を逃れ、国内外にいる人」。躊躇せず元気に手を上げてください。Aだと思ふ人。Bと思ふ人、一人、少数意見、ありがとうございます。Cだと思ふ人。テロも入るといことですね。D、ちらほら。自然災害が入ります。E、貧困が入ります。F。手が一人も上がりませんでした。正解はAです。「難民の地位に関する条約」に、迫害の恐れを逃れ、すでに国籍国の外にいる人たちで、迫害される理由が「人種、宗教、国籍もしくは特定の社会的集団の構成員であることまたは政治的意見を理由に迫害を受けるおそれがある」という定義があります。典型的な例はノーベル平和賞を受賞したマララさん。女子教育をご本人も受けたいと、推進してきました。それはマララさんの国であるパキスタンでは、一部から政治的な意見であると見られました。さらに女子教育を推進する特定の社会的集団の一員と思われて、さらに宗教的なこともおそらく関係して、さらに彼女がどういう民族的な帰属であったのかということもあり襲撃を受けるという、一言でいうと著しい人権侵害、命を狙われるのは著しい人権侵害の最たる例です。彼女の場合、イギリスが引き取ったということですが、イギリスに行った瞬間、明らかに難民として国籍国の外にいる。パキスタン政府が直接彼女を狙ったわけではないですが、パキスタン政府は、過激派から狙われていたマララさんを保護できなかった。国籍国の保護を受けられませんでした。これ

はマララさんには当てはまりませんが、難民というのは一般のメディアでは「F」だというように報道されているかと思いますが、実際は「A」だということを1点、覚えておいていただけたらと思います。

続いての質問です。「2018年末現在、人口比で最も多く難民を受け入れている国は？」。ドイツだと思う方。ちらほら。スウェーデンだと思う方、ちらほら。ヨルダン、レバノン、多いですね。トルコ。これは難しいと思いましたが。トルコに手を上げた方、絶対数ではトルコが多い。人口比でいうと圧倒的にレバノンなんです。1000人中156名。これは登録されている難民です。多くの方が、いろいろな事情から登録をしないことを選んでいますので、実際には10人に3人、30%強の方がシリアからきている。レバノンはパレスチナ難民も受け入れていますので、非常にたくさんの避難民を受け入れているわけです。イスラームと聞いて私が一番に思うのは「難民に優しい国」ということであり、私の中のイスラームの印象の一つです。

シリアから難民が来た時、みんなが地中海を超えてヨーロッパに来るような報道がされていますが、決してそんなことはなく、世界の80%以上の難民は途上国、先進国ではない国で保護されている、そういう国がホスト国になっている現状があります。

私の中では最も脆弱な立場にいるのは難民ではありません。なぜかというのと、昨年末現在、世界中で4000万人強の難民がいるといわれていますが、この中にはレバノン、ヨルダンからイギリスが受け入れ、イギリスで市民として生活を始めている難民もいるわけです。イギリス国内で必ずしも迫害の危険にあっているわけではない。もう一つはさまざまな国々がシリアの方々にビザを発給していません。「来られると困る」、ということで。国外に脱出することが難しいので、国内でしか避難することができない人たちも沢山いる。迫害を受ける、狙われる状況に近いところにおかれている方々も非常に多い。脆弱性という意味でいうと、ホスト国に行って「私は難民です」というけれども、まだホスト国の政府や国際機関が難民とは認めていない、宙ぶらりんの状態、いつ自分が難民認定されるかわからない、難民認定の審査が10年かかる方も珍しくないんですね。ずっと宙ぶらりんというのは、非常に厳しい10年間です。「明日、この国に在ることを認めてもらえるかもしれな

い、明日、迫害の危険があると思っている母国に追い返されてしまうかもしれない」と究極の状況に10年間置かれていることは地獄だと思います。統計上、多くの難民がいて大変という気持ちはわかるんですが、難民の数の多さだけに惑わされないでいただきたいと思います。

「難民の受け入れ」といわれます。しかし難民の受け入れには大きく二つの違う方法があります。日本で有識者とされる方々の中でも、二つをごちゃまぜにされて筋が通らないことになっているので、ここは時間をかけて説明します。日本の例では出身国ミャンマーの方が、ミャンマーを第一次国としてやってくる。第三国は日本とします。まず、ミャンマー内で紛争や迫害があります。ロヒンギャの方々は、まだ国内で厳しい状況です。国境沿いに住んでいない方々については、一旦は国内避難民になる。国内は危ないのでマレーシアにいきたい。ロヒンギャの方はミャンマーの国籍、国民とされていない方が多いのでパスポート、IDをもっていない。無国籍者として、避難の途中、国境沿いでどこの国の人かわからなくなるということが生じるわけです。それでもマレーシアにうまく入れたとします。その後のアイデンティティは「難民」や「庇護保護者」となる。しかしマレーシアは「難民条約」に入っていない。したがって「難民認定」を受けてマレーシアに定住して市民になる方法がありません。「難民不認定」で戻されることもあります。これを誰が代行しているか。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）がマレーシア政府から許可をえてマレーシア政府に代行して「難民認定審査」を行なっています。マレーシア政府がなぜUNHCRに許可をするかという点、「認定」「不認定」の判断をするかわりに「難民認定」された人については全員、第三国に送り出すことを条件に、すぐにロヒンギャを追い返さないことになっているんですね。そこで、「第三国定住」として老舗のアメリカ、スカンジナビアの国々が昔から「第三国定住」という形で難民を受け入れ、そこで市民としての生活を始めています。その一方で、ミャンマーから直接、日本に来ている方もいます。日本は難民条約に入っているため、日本政府が「難民認定」「不認定」作業をする。日本が第一国、庇護国となっているか、他のマレーシアやタイを経て日本にくるのか、二つの受け入れ方がある。ステージが違うだけではなく、いろいろな意味でかなりの差がありま

す。この二つをごっちゃにして考えると、難民受け入れの難しさや意義が全くわからなくなるので、今日、覚えておいていただきたいことの一つです。そうこうしている間に、もしかしたらミャンマーでも平和が訪れるかもしれない。2015年からマレーシアにいる難民の方で日本に第三国定住の形できています。その方々が、将来的にはもしかしたら帰っていくかもしれない。そういうことを含めながら今日の日本にきている難民に対する支援を考えていく必要があります。

伝統的な受け入れ方が二つあります。一つは自力でたどりついた難民を受け入れる方法としての庇護。たどり着いた難民は「難民でない」とわかるまでは絶対に送還してはならない。もう一つは「第三国定住」であり、受け入れ政府の完全な自由裁量で別の国を経てやってくる。全くこれは別のやり方です。

今、マレーシア、ミャンマー、バングラディッシュの話をしました。グリーンのところは難民条約に入っている国、黄色は議定書に入っている国、色があるところはいずれかの条約に入っている国です。グレーはアジアが目立ちますが、難民条約に入っていないので、100万人のロヒンギャの方がバングラディッシュに逃れたといわれています。そういう方たちは国が保護するだけでなく国際機関が代わりをしています。アジアにおける難民保護はこれからだと思います。

「第三国定住」。他国が抱えている難民を積極的に受け入れようという国が増えてきています。理由の一端にはシリア難民危機があったと思います。今年5月まで私はイギリスにいたのですが、トルコにいたシリア難民を、イギリスの当時のキャメロン首相が2015年に「2016年から向こう4年間、2万人のシリア難民を第三国定住として受け入れる」と発表しました。私が友だちになったこの写真の彼女は、写真を撮る直前までは何もつけていなかったんですが、「ちょっと待って」と黒い伸縮自在なものをつけて、外に対する顔と中に対する顔が違って、面白く思いました。ブライトンでの知り合いです。幸せにブライトンで過ごしているところです。この写真は、2010年に日本に到着したタイにいたミャンマー難民です。

ただ「第三国定住」には問題がありまして、どの国が、「第三国定住」で

どのくらい難民を受け入れていたかという統計です。アメリカはトランプ政権までは年7万人くらい「第三国定住」で受け入れていました。以前の職場である国際移住機関では私はオペレーションにかかわっていたのですが、東南アジアからアメリカに移動する時、成田空港を経由する。その間に身体障がい者の方で障がいが重度なので酸素ボンベやストレッチャーがないと成田空港内での乗り継ぎもできない方をアメリカは積極的に受け入れていました。アメリカという国に対する思いは色々ありますが、少なくとも2015年までは世界の難民の「第三国定住」はアメリカがいなければニッチもサッチもいかなかったんです。特に脆弱な難民を多く受け入れていたのがアメリカでした。それがはっきりわかるようにダウンと減っているわけですね。いわずもがな、トランプ政権の政策の影響です。ヨーロッパがどんどん増えてきています。カナダ、オーストラリアも。カナダが増えたのはトゥルドー首相の政策です。国際関係論を学んでいる方は分かると思いますが、「第三国定住」の勢力構図は、以前はボックス・アメリカーナ、アメリカ万歳だったわけです。ところがこの頃は少しずつ勢力均衡、バランス・オブ・パワーになってきている。これがどうなるのか、面白いと私は見えています。

「庇護制度」について。ミャンマーから日本にたどりつく方々がいるとします。たくさんいらっしゃいます。去年は全体で1万人くらいの方が日本に自力でたどり着いた。自力で自国を脱出して他の国にいかなければならない。たどりついた後、マレーシアだったら国連に対して「自分が迫害される、襲撃される恐れがある」と立証しないといけない。立証手続に何年もかかることがある。そして受け入れる政府は一旦、入国したら「難民でない」と判定されるまでは追いつ返すことはできない。これは「難民条約」でうたわれていることです。ところが多くの不確定要素もあって、たとえばシリアを逃れてヨーロッパにくる多くの方が密航業者に助けてもらわないと国を出ることもできない。その一方で「第三国定住」というのは受け入れ国や国際機関が避難国からその国までつれてくる。難民かどうかの判断は、日本にきている方であれば、タイなり、マレーシアなりで、すでに判断が行われているので日本で長々しい法廷闘争をしなくていい。日本政府はUNHCRが行なった「難民認定」をそのまま受け入れているので、日本に入ってからすぐ市民

としての生活ができる。タイからミャンマー難民の第一陣の方々が来日した時、私は受け入れを担当していたんですが、空港まで政府の方が迎えにきて難民事業本部という政府の委託を受ける団体がアパートも用意し、食事も用意していて、冷蔵庫に翌日の朝ご飯も準備してあって、という状況でした。翌日から日本語教育が始まる。そういう生活でした。一方で同じ境遇の方が、自力でたどり着いたとすると、大阪の茨木にも収容所がありましたが、収容されている人もいたわけです。受け入れ国からすると事前に来日希望の難民のプロフィールを吟味して、マレーシア、タイにいて一人ひとり面接をします。事前に国連難民高等弁務官事務所などがプロフィールを作成しています。「難民受け入れ」と一言でいっても大きく違う制度がある、ということを知っていただけたらと思います。

以下、まとめとして。自力で母国を脱出する力による方法。「庇護制度というのはエリート主義である。強くないと外に出られない」といわれています。世界の約80%の難民が発展途上国にいる。多くの避難民は戦争や紛争を逃れているが、「難民」とは認められない。世界各国の中で「難民」を受け入れ負担をする制度がない。EU加盟国の中でもギリシャやイタリアの負担が非常に大きくなっている。先進国はお金で解決しようとする。これは「難民封じ込め政策」といわれています。これは汚名でもありますが、世界の「難民学」においては「ジャパニーズ・ソリューション」というあだ名もついています。「難民」とされる方々は、よりすぐりの人々、これがいいことなのか、悪いことなのか、欧米の難民学でも議論を呼んでいます。ここから先は質疑応答の中で日本のことについてお話させていただければと思います。ご静聴ありがとうございました。

竹内 橋本先生、ありがとうございました。それでは休憩に入ります。紙でのご質問は実行委員にお渡しください。QRコードでのご質問もよろしくお願ひします。

質 疑 応 答

小久保 学会員による3つの質問に先生方からお応えをいただきつつ、皆さんと一緒に議論していきたいと思います。始めに中島咲寧さん、よろしくお祈りします。

質問①

「**実地経験が自身の研究にどのように影響したか**」

中島 グローバル地域文化学部アジア太平洋コース3回生の中島です。「実地経験が自身の研究にどのように影響したか」という質問をさせていただきます。安達先生、橋本先生のお二人は、現地へ出向いて人々の声を聞いたり、それをかれらの支援につなげる実地経験が豊富であると伺っています。私たちGR学部の学生も、それぞれの研究テーマに応じて、現地での経験や活動を研究に落としこむアプローチを今後とっていくことがあると思います。現地での活動を範囲に含むご自身の研究が、文献をもとにしたオーソドックスな研究アプローチといかに異なるか、そしてなぜそれが重要かについてお話いただければと思います。安達先生からよろしくお祈りします。

安達 実地経験がどういう影響を与えるか。むろん実地経験をしないと研究できないということは前提ですが、いろんな人に出会うことが重要だと思います。文献を読むことは大切ですが、それだけだと、ある種のステレオタイプができて、そのなかで物事を語ってしまうことになる。そうなると新しい点が見えてこない。言われていたことと違う点に気づく、新しいものを発見するという意味で、実地経験は重要です。私もこれまで、様々な人と出会いましたが、実地経験をしないと、外に出かけないと何も始まらないというのが経験に即した意見です。

私は、もともと社会学理論家のニクラス・ルーマンの「社会システム論」を研究していたのですが、理論では食っていけない、仕事はないとわかり、何か他でお金をとれる研究をしないと感じていたわけです。たまたま東北大学で「21世紀COE」というものがあって、海外のことを研究するとお金がとれるということで、そうしたよこしまな理由で現在の研究を始めたというのが正直なところです。なので私は、博士課程になってはじめて、実地調査を始めたのです。

その中で、色々な人と出会いました。はじめて出会ったムスリムは、イギリスのある愉快的なインド系の男性でした。彼は、イギリスでの生活や子育てについて、さまざまなエピソードを交え、面白おかしく語ってくれました。その人の現在のパートナーは同じインド系の女性ですが、彼には白人系の女性と結婚していた過去がありました。また現在のパートナーは、彼に「もう1人、妻をめとればいいのに。イスラームだから4人妻をもてるから」と、話しているのを耳にしました。というのも、彼女は、働きながら家事もしており、ともに中年である夫の世話をするのが大変だと感じているからでした。もう一人妻がいれば、負担がシェアできるから、と。その発言が本気なのか、冗談なのかわかりませんが、夫の側が新しい妻を迎えることを望むことばかりだと考えていましたが、逆に妻の側のそうした考えもあるのだと驚いたことを覚えています。むろん、二人以上の妻を娶ることは、現実的には、イギリス社会という点でも、イスラームの観点からも、極めてハードルが高いのですが。

またイギリスで、コミュニティのアジア系の若者と一緒にサッカーをやっていて、僕なんかは素人だけど、みんなめっちゃめっちゃうまい。その点で、イギリスの普通の若者にみえるのだけれど、コミュニティのパーティとかで出会い、話すと、イスラームのことをいろいろなエピソードや具体的事例を交え、教えてくれる。そういう日常的な出会いのなかで、彼女／彼らへの関心や研究のアイデアが生まれてきたりしました。また、トルコでおこなわれた学会では、マレーシアの女性ムスリム研究者と話す機会がありました。彼女は、兄夫婦と3人でトルコに来ており、家族との観光に僕を誘ってくれ、首都イスタンブールを案内してくれました。また私のフ

ライトが深夜便だったのですが、彼女は、ホテルのロビーで夜遅くまで一緒にいてくれ、タクシーまで呼んでくれました。イスラームでは女性と男性はあまり親密にしてはいけない、ムスリム女性はシャイで暗い、といったイメージがありましたが、彼女はそれとは全然異なり、すごくフレンドリーだったのです。そういった経験から、「ムスリム女性の信仰と社会との関わり」に関心をもつようになりました。

このように出会って見ないとわからないことがある。出会いを通じて、今まで思ってもいなかったことに関心をもつようになる。そういう点で、外に出てみると新しい発見があるのだと思います。そのために、ガチガチなステレオタイプをもっていない方がいい。先行研究をがんがん押さえていくより、多少の余裕をもっていく方がいい。ガチガチにやっていくとステレオタイプで見ることがあるので。出て行って見て、話を聞くこと、準備だけでなく、実際にいってみると、そこで見えてくるものがあります。そういう中で改めて文献を読んでみると、「やっぱり同じことをいってる」とか、「全然違うところがある」とか、色々なことを発見することができます。

実は僕は寝るとき、立っているんです。横になって寝られない。なぜなら、色々な人と出会って、その人たちにたくさん助けられたからです。寝転がると、どこを向いても足が、誰かの方向に向いてしまうわけです。感謝する人には「足を向けて寝られない」わけですから、僕は立って寝ているわけです……むろん冗談ですが。いずれにせよ、学生のみなさんには、実際に出会いを通じて、いろいろなことを考えて欲しいです。

出会いが重要なもう一つの理由は、「人間とは誰か」ということと関わっています。抽象的に「人権が重要だ」というのは当然のことで、みんな言われてきたし、それは知っているわけです。ですが、そうした「誰か」のことを、自分のこととして思うことは結構難しいのですね。「人権や人の命は大切だ」と、みんな思う。でも、みなさんにとって一番大切なのは家族です。家族は、日常的に接しているわけですから。気にかける「人間」とは、抽象的ではなく、具体的なものなのです。普段生活する時、ほんとに困っている人たちを助けていますか。そういうわけではないで

しょう。その時、人権が言及する「人」とは誰なのか、自身が関心をもつ存在としての「人間」とは誰なのかという境界は、自身の経験によって決まってくるものなのです。だから、色々な人と接することが大切なんです。「人権は大切だ」と学ぶことは大事だけれど、実際にいろんな人会って見ないと、そうした考えを日常の生活のなかで保つことは難しい。ムスリムでもいいし、障がいをもっている人でもいい。自分が普段、接していない人たちと接すると、その人と同じようなカテゴリーの人たちが困っていると、それは「自分と関係する人たちの問題だ」となる。関心の地平が拡張するわけです。そういう点で、学生のみなさんは時間があると思いますので、研究に限らず、多くの人と出会って欲しいですね。

中島 橋本先生、お願いします。難民や移民にかかわる国連等の公的機関での経験もおありですが、ご自身のセオリーと実際に働いてみてのギャップなどの経験がございましたら、それも含めてお話いただけたらと思います。

橋本 難民イシューについては、2回、実地経験が影響を与えてくれたなと思います。第1回目は学部時代に旧ユーゴスラビアという国に行って、そこで家を追われてしまって、しかも孤児になってしまった子どもたちと遊ぶというボランティア活動をしました。その時に実際に家を追われて、当時、ユーゴスラビアはどこに国境があるか、自分が国内難民なのか、自分はどこの国籍なのか、わからない状態で、そこで2カ月間くらい、当時、セルビア共和国があって、そのうんと田舎に避難していた孤児になってしまった子どもたちのことを知ったんです。その経験を通して、私は「難民イシューについてきちんと勉強したい」と強く思いました。それは大学4年生の時でしたが、卒業後、イギリスに留学して難民学・難民法について学んだんですね。ユーゴスラビアに行く経験がなければ、ここに私はいないということが第1回目の経験でした。

第2回目は2008～2015年、東京にある国連機関で働いていて、その時に日本政府が難民の「第三国定住」での受け入れを開始しました。その時

には実務家として、日本政府の方とどういうふうに関係を受け入れるか、彼らに対する日本語教育をどうするかを毎日、試行錯誤していました。日本は難民に冷たい国といわれていて「難民鎖国」という言葉もありますが、なぜそういう日本が「第三国定住」を始めたのか。毎日、実務をやりながら私自身、不思議に思って、それが私の博士論文のリサーチエッセイになったんです。自分の研究テーマもたまたまいただいたというか、そういう仕事をやりつつ不思議に思ったことを博論のテーマにしたということです。実地経験がなければ、今、ここにいないという感じがします。

中島 ありがとうございます。私たちがこれから研究を進めていく上で、大変参考になるご意見をいただくことができました。私からの質問は以上です。

小久保 次の質問に移ります。学部4回生の鈴木縁さん、お願いします。

質問②

「イギリスの事例から見た、宗教的・民族的少数派における
日本の多文化共生の未来」

鈴木 グローバル地域文化学部ヨーロッパコース4回生の鈴木縁です。安達先生に質問をさせていただきます。ご講演を拝聴することで、イギリスにおけるシティズンシップに基づく権利という文脈のなかでムスリム女性がどのようにアイデンティティを獲得しようとしていくのかが、とてもよくわかりました。今回の学術講演会のテーマが「いま、ここにあるグローバル」ということで、イギリスでの事例から日本において私たちが今後いかに考えていくことができるかについてお聞きしたいと思っています。グローバル化が進むことで物理的にも精神的にも境界がなくなっていくのはもちろんですが、特に2020年のオリンピックに向けた社会変動のなかで多文化、多国籍の問題がどんどん可視化されていくのではないかと思います。

す。それがムスリム女性のように必ずしもvisibleな問題になるかどうかはわからないところもありますが。特に宗教や民族的慣習の観点から、どのように日本が変わっていくべきなのか、変わっていく可能性があるのか、ご意見をお聞かせいただきたいです。

安達 イギリスやマレーシアの研究をやっていると、「その経験を日本でどう活かせるのか」と良く聞かれます。正直、「あまり活かせない」というのが私の回答です。というのも、状況があまりにも違いすぎるからです。エスニック・マイノリティの人口や外国人人口のボリュームが、そもそも違いすぎるので、「イギリス的な多文化主義を日本に導入しましょう」といっても、そうはなかなかいかない。「日本もこういうふうにしましょうよ。難民に優しく」云々といっても、現実はなかなか変わらないのではないのでしょうか。

私は、理想主義者というよりはプラグマティックな考えをする人です。人権をめぐる状況がどんなものであろうと、日本もいずれ移民大国になるだろうと思っています。日本の人口問題はどうにもならない、人口をサステナブルに維持しようというのはどう考えても不可能だからです。イギリスだってヨーロッパだって無理なのですから、日本だって不可能なわけです。遅ればせながら人口に関する問題は、ここ3、4年、メディアでも議論されるようになっていますが、はっきり言えばもう手遅れなんですね。そういう認識のなかで、移民や社会について考える必要があるのです。良い／悪いとか、安心／不安とか、そういうレベルではなく、われわれの社会は移民に頼らざるをえない。そうした危機感をもってやっていかないといけない。移民を入れるといっても、人口が1億人いる時に1000万人入れるのと、人口が5000万人になった時に1000万人を入れるのでは、社会が受けるインパクトは違うわけです。いわゆる「日本人」と呼ばれる人口がまだ存在するうちに、移民を多く受け入れる方がまだましだというわけです。移民を受け入れた後、問題はいろいろ生じるわけです。たとえば社会的コストの問題、失業の問題、受け入れの学校の問題とか。私も、外国にルーツをもつ子どもの学校適応をめぐる研究をしており、小中学校で参与

観察をしたり、子どもの支援NPO団体を立ち上げたりしましたが、学校や地域の受け入れは十分ではないのです。受け入れの経験が乏しいことで、多くのコンフリクトや対策の不備があるわけです。ですが、だからといって環境が整うのを待って受け入れをおこなうのでは、もう遅いわけですね。そういった認識でやっていく必要があるのです。

インターネットでは、「イギリスのキャメロン首相が述べるように、ヨーロッパで多文化主義は失敗に終わった」といった意見をよく耳にします。そして、「それみたことか。多文化主義では社会の統合はうまくいかないぞ。移民は排除すべきだ」という人たちが出てきます。でも、イギリスは多文化主義をやめていません。移民を受け入れていくことを前提に社会を作っており、そうしないとやっていけないということは自明だからです。日本も受け入れざるをえない、それを前提にしながら制度設計していくことが必要なんです。実際、政府もそう考えているわけです。有権者に不人気なのではっきりと言いませんが。いずれにせよ、現実を直視し、そこから立ち上がっている問題にどう対処していくか、そういうことが今後、必要になってくるのではないかと思います。

グローバル化を意識しながら、いろんな議論がなされています。国際関係系の学部も増えていて、海外の経験を踏まえて、今ある日本の現状をどう理解するかということを考える機会が増えています。みなさんの世代は、どういったルートを辿るにしろ、どういった仕事につくにしろ、移民の方との関係について考えることを避けて通ることはできません。むしろ、みなさんがすべて、海外で生活したり、国連の職員になるわけではありません。でも、ローカルな社会のなかで、そういう人たちと出会って、直面するいろんな問題を解決しなければ、社会や地域が成り立たない時代にわれわれは生きているのです。こうした点を認識し、今後のキャリアや生活を考えてもらえればと思います。それは大変なことですが、逆に言えば、この学部で学んだことを活かせるチャンスがあるわけです。

鈴木 ありがとうございます。

向川 ここでフロアから質問をさせていただきたいと思います。「各国でのムスリムの増加が、人々の恐怖を増加させていると言及されていましたが、実際に現象はどのように見られますか？」。

安達 どういうふうに見られる、というのは？

向川 実際にどのような現象が出ているのかということです。

安達 ヨーロッパには、「イスラモフォビア」、つまり「イスラームに対する嫌悪」が存在しています。スカーフを被っている女性、ヴェールで顔が見えない女性、あるいは顎鬚を伸ばしている男性など、宗教的ないでちをしている人たちが増えていますが、それにある種の嫌悪や恐怖を感じている人たちがいます。そうした環境のなかで、メディアや政治家が不安を煽るような言説を振りまくわけです。近年ヨーロッパでは、「国家フェミニズム」とか「ゲイフレンドリー・イスラモフォビア」といわれる運動があります。かつて「右派」といわれていた人たちは、基本的に性的マイノリティに冷たかったんですね。ですが彼女／彼らが、急に性的マイノリティを擁護し始めたんです。ゲイを擁護し始めたのです。なぜかという、イスラームは同性愛やゲイを認めない、と考えられているからです。性的マイノリティを否定するムスリムはリベラルなヨーロッパ社会にふさわしくないという主張が、元来リベラルとはほど遠い人たちによって叫ばれるようになってきているのです。それを、ゲイフレンドリー・イスラモフォビアと呼んだりします。また、国家フェミニズムは、国家ぐるみで社会がフェミニストのように振る舞い、ムスリムを排除しようとする動きを指します。たとえば、ある国では市民権の獲得の条件に、異性と握手することが求められることがあります。こうした握手は、女男の不必要な接触を禁じるイスラームに抵触する可能性があるわけですが、それができないことを理由に、ムスリムに市民権を与えないという事例が報告されています。たとえばオランダは、かつてヨーロッパで一番、多文化主義的な国家とみなされていましたが、いまや国家フェミニズムに基づくヨーロッパ中心主義的な

社会となりつつあります。こういうことが現実には起こっているわけです。

小久保 ありがとうございます。最後に学部3回生の森友花さんから質問をお願いします。

質問③

「難民・多文化共生社会における課題に、現代を生きる私たちが
個人レベルでできること、考えるべきことと」

森 グローバル地域文化学部3回生の森友花です。橋本先生に質問させていただきます。第三国定住を始めたように、日本でも法整備の面では難民や外国人労働者の受け入れを進めていく方向に見えます。しかし社会体制や教育面で外国人あるいは外国にルーツをもっている人々の受け入れ体制が全然できていないという点にズレを感じています。外国人＝観光客であって、日本に難民はいないというイメージが強いかと思います。法整備と市民社会のふたつのレベルの間にギャップがある中で、私たちひとりひとりが市民あるいは国民として何かできることはあるでしょうか。

橋本 たくさんのポイントがあったのですが、まず日本にはまだ難民や移民というコンセプト自体が根付いていないように見えます。他の先進国、例えばイギリス等に比べて、人口比でいえば、日本にいる難民・移民の数は圧倒的に少ないです。西ヨーロッパのルクセンブルグに至っては人口比で50%。日本はまだ2%程度です。人口比では少ない。日本は明治維新まで鎖国でしたが、第二次世界大戦中、在日朝鮮・韓国人の方々がつれてこられて常に100万人くらいの方やその子孫が、1945年以降もずっといらっしゃる。歴史的には、日本は隣国からの受け入れは結構ある。1975年以降はインドシナ難民の受け入れを11000人くらい。1990年の入管法改正で多くの日系人も受け入れました。人数としては他国と比べるとまだ少ないですが、歴史的にはそれなりの経験がある。日本が今まで外国人、難民、移民を含めて、どういう歴史をたどってきたのかを知ることも必要だと思

ます。

私が①の質問にお答えしたと自己矛盾するのですが、学生の方々に申し上げたいのは、ボランティア活動というと遠くに行くことが偉いことだとか、アフリカに行ってきたとか、レバノンに行ったとか。そういう必要は一切ないです。日本にも留学生の方が増えています。外国につながるルーツをもつ子を教える先生がいない。京都にはまだ「第三国定住」の方は少ないですが、これから増えていきます。まず近くから周りを見回して外国につながるお子さんがないかとか、留学生の方もいるので、まずは近くの隣人で外国につながる方々との交流をやっていったらいいかなと思います。

2点目として外国につながる方々に対しては、特に難民の場合、「何かをやってあげないといけないのか」とか構えてしまう。この問題に携わって20年を超えるんですが、どんな難民の方も、彼らは私たちに施しを求めているわけでは一切ないんです。彼らは私たちに友だちになってほしい。同じ目線で同じ人間として個人として尊重してほしい。話を聞いてほしい。もっと言うと、私は彼らにいろんなことをお願いしたりするんですね。イギリスでボランティアをした時、ギブ・アンド・テイクとイコールで「お料理のつくり方を教えてほしい」「言語的なことについて教えてほしい」とか頼みましたが、ある意味、相手を尊重していることの現れだと思うんですね。大きなことはできなくてもいいんです、彼らはそれを求めているから。まずは友だちになってみる、コンタクトをとってみる。それが一歩ですし、それで十分なことも多いです。

難民や移民の受け入れ政策については「大体、こうするといいな」という自分なりの意見はもっているんですが、難民の受け入れ、移民との多文化共生で100%の答えはないと思っています。全員がハッピーになるとか、いろんな国が困難に直面していて、「解がない」という言い方がいいと思います。日本でもこの問題が、より多くとり上げられるようになって声の大きい人たちがいることを100%、真に受けなくてほしい。何かの主張に接した時、「ほんとにそうかなのかな？」と、もう一度原点にあたってみる。「それが正しいのかな？」と。特に多文化共生、難民、移民

の問題は白黒はっきりということは、そんなにないと思っています。ダークグレーというか。そこは実務経験を通していわゆる人権派の弁護士の方から入管職員の方まで多くの実務家の方と出会って「勧善懲悪というのはないな」という感覚です。いろんな意見に接するのはいいが、他人の意見を鵜呑みにしないこと、必ずしも100%の解が見つからないかもしれないと。それを前提に、いっしょに考えていけたらいいのかなと思っています。

森 ありがとうございます。

向川 ここで再びフロアからの質問を取り上げさせていただきます。「メディアでも収容所のことばかり取り上げられていたりしていますが、日本はなぜ第三国定住の実施を積極的に進めないのでしょうか。また国の民族構成や社会のあり方によって受け入れのしやすさも異なると思いますが、日本が一概に「難民を受け入れないからダメ」というも適当な批判であるとは言えないのではないのでしょうか」という質問が来ております。

橋本 収容問題についてはいろんな意見が交錯していますね。法務省の収容所視察委員会の委員を2010～2013年の3年間していたのですが、収容所施設委員会ができあがった時の最初の委員10名の一人でした。ピフォー・アフターで考えたら大分よくなっているというか、菌に衣を着せず「こうしてください」と意見をいって、結構聞いていただいていると思っています。私の印象では「仮放免」は増えたり、減ったりしています。収容者数も日々変わるので切り取り方によりますが、オリンピックに向けて準備していることはあるのかなと思うことと、国家の義務から考えると統治という感覚がどうしてもあって、収容されている外国の方は多くの場合、入管法以外の何らかの違反を犯している方もいるので、国家公務員の考えとしては「何かあってはいけない」という、日本の公務員は、いい意味でも悪い意味でも真面目なので責任感があるのかなと思います。ただ「庇護申請者」が収容されているとしたらそれは反対だと、私の意見としてもって

ます。「第三国定住」を積極的にしているか。2010年から始めていますが、数はものすごく少ない。それも日本政府が真面目で緻密なことと重なってくるんですが、「失敗は許されない」ということで始まりました。数が少ないことは、冒険できないという日本的なやり方だなと思います。もっと数は増やせると思うけど、日本的なやり方の、良し悪しがあって、悪いことばかりではないかなと。石橋を叩くようなやり方というか。日本型定住は、非常にきめ細やかで政府が全面的に支援する感じです。アメリカのように年間7万人受入れていて、受け入れ後は、ほとんど民間団体に丸投げで「自分でがんばってね、機会はあげるけど」という感じなんですね。そうでないと7万人は受け入れられないです。アメリカ的な方法を日本がやるかという点、非現実的だろうと思います。数的には少ないが、実質的にはどうなのかも、見ることができるかなと思います。

森 ありがとうございます。

小久保 先程回収した質問を私たちで集計し、みなさんがより関心をもった質問をお尋ねします。時間の都合上、すべての質問は採り上げられませんが、その点はあらかじめご了承ください。

向川 フロアから橋本先生に質問が来ております。「先ほど先生が仰っていた「第三国定住が大好き」というお言葉の大好きという言葉に含まれている意味を聞きたい」とのことです。

橋本 庇護法での受け入れ方、「第三国定住」の受け入れ方、両方に実務でかかわってみて「第三国定住がいいな」と思った瞬間がありました。多くの申請者の方は苦しい庇護申請をしている。ホームレスになったりすることもある。その一方、「第三国定住」の方を成田空港に迎えにいったら、入管の方が待ち構えている。「在留カード」も、成田空港についたその瞬間に出て「定住5年」と書いてある。庇護申請をしてきた人たちは何十年も在留カードをとることができない、ものすごい「魔法のカード」の

ようなものだと思いますが、第三国定住難民に対しては入管の方が待ち構えて渡してくれるわけです。着いた瞬間から日本に定住する。庇護申請者の苦しみを見る時、第三国定住がもっともっと全世界で数的に増えて、日本もそれに参加したら良い、と思います。地中海で、なんで毎年、何千人もの人が命を落とすかという、第三国定住の数が世界で足りてないからです。緊急で第三国定住する必要がある数は毎年120万人と国連は推定していますが、「第三国定住」が与えられるのは年間最大でも10万人くらい。保護を必要とする方々が自分の命をかけて地中海の荒波に身を乗り出していなくて済むために「第三国定住」を増やしていく必要がある。その方が、受け入れ側にとっても、国を出てくる人にとっても安全でスムーズであることは、私が第三国定住が「大好き」な理由の一つにあるかと思っています。

向川 ありがとうございます。

太田 安達先生に。「イスラームの教育について。公立学校で宗教教育をどのように行なっているか？」という質問です。

安達 イギリスでは「宗教教育」がありますので、イスラームについて学ぶ機会があります。公立学校でも、イギリスの学校はコミュニティの影響力が強いので、ムスリム児童・生徒が多ければ、イスラームについて学ぶ機会がそれだけ増える可能性があります。イギリスでは、宗教学校に公的資金を導入する枠組みがあります。しかし、ナショナル・カリキュラムもちゃんと教えることになっています。他の学校と同じことを教える。その上でイスラーム教育の時間がある。たとえば、一部のキリスト教やイスラームは、「進化論」に批判的な立場をとっています。では、どのように進化論といった科学的知識を、宗教的な世界観の枠組みで教えるのかという問題があります。単に、「進化論はけしからん」といってしまうとテストでいい点をとれないわけです。だから、宗教学校では、進化論を単に否定するのではなく、自身の宗教の枠組みのなかで説明する方法や手段を

もっているのです。イスラームでは、音楽や絵を書くこともまた、論争的な問題です。それらもまた、イスラーム団体のガイドラインや各学校のコミュニティと相談しながら、子どもに教えるやり方が考案されたりしています。このように宗教学校では、さまざまな知識が、イスラームの世界観を踏まえ、教わることがあります。また、イスラーム学校では、女性と男性は異なる空間で教育を受けることが多いです。ですが、ナショナル・カリキュラムを履行する義務があるので、それはきっちりやられています。実際、イスラーム系を含め、宗教学校の生徒たちの成績は高いという点は付言しておく必要があると思います。

太田 もう一問、安達先生に。「準備ができていない時はヒジャブをしなくてもいい」ということについて説明を詳しく聞きたいです。

安達 「イスラームは寛容な宗教だ」といわれる理由は、無理強いをしないことにあります。神は、人に強制をしない。ハラールでないものも、それがなければ死んでしまうという状況になれば、「食べても仕方がない」と考えられています。妊娠している時は、ラマダンの際に断食をしなくてもいい、など。義務履行を延期する理路が、イスラームにはあるわけですね。それはまさに「準備ができてない」という、個々様々な状況があることを認めているわけです。大学で他の仲間と勉強したい、仕事を探す時にスカーフをしていると不利になってしまう。そういう時にはスカーフを外す。その際、彼女たちは「準備ができていない、覚悟ができていない」と考えるわけです。先ほどもいいましたが、イスラームは「試練」です。イスラームのルールは、天国へと至るためのテストなのです。テストでがんばれば天国にいける。でも、準備ができていないなら、自分の覚悟ができた時、自分がその時だと思った時に試練を乗り越えればよい。イスラームの基本的な教えは、神のことを考え、お祈りをするのですが、イギリス社会の若いムスリムたちはそうしたことができない時もあるかもしれません。「いま可能な範囲で、できうるだけのことをやっていく、そして、適切な時期になったら神の試練と向き合う、それでいいんだ」という発想が

あるわけです。それを批判する人は、外面を見ていっているだけ。でも、神のことをどれだけ考えているのか、そういう心は見えないでしょう。心の内側は誰が見えるか。それは神だけなんです。だから、他人について批判はできませんよね、と。スカーフ着用といった目に見えるイスラームの義務を履行していないからといって、他者を批判することはできない、あるいは、批判してはならないといった寛容さがイスラームにはあるわけです。その人が地獄に行くのか、天国に行くのか、その時になってみないとわからないわけですから。他人がそれについてあれこれいってもしようがないでしょう、というわけです。そうした考えが、イスラームの「寛容さ」と結びついているということだと思います。むろん、そうした義務履行の延長を、神がどう判断するかは別問題ですが。

太田 ありがとうございます。

向川 フロアからのオンラインでの質問を続けさせていただきます。橋本先生に質問が来ております。「庇護申請者になるか、第三国定住になるかの線引きは国連などの機関が介入するのか、それのみで決められるのでしょうか？」との質問です。

橋本 基本的に「庇護申請」を自分で行う場合、原則論でいうと国連は「シリア大脱出作戦」は原則的にはできないことになっています。基本的には国連機関、国際機関は自力で脱してくる人を、国の外で待つしかないというのが大原則です。「第三国定住」というのは、シリアからトルコに既にやってきた難民について、「この人はフランス語ができるからフランスかカナダのケベックへ」と振り分ける作業ですが、それができるのは原則的には国連機関になっている。例えば、トルコにいるシリア難民が「第三国定住」経路でイギリスに行くためには、UNHCRがイギリス政府に「3人の家族がいるが、キャメロンさん、どうですか？」と打診する。原則的に国連機関の手続が必要になるということです。

向川 ありがとうございます。

小久保 それでは時間になりましたので、これにて質疑応答を終わらせていただきます。最後に、多文化共生や難民支援などグローバル 이슈を他人事ではなく、「いま、ここにある」問題として考えることの大切さについてお二人の先生からメッセージをいただきたいと思います。安達先生から、よろしく願います。

安達 自身が立脚している、「いまここ」についての正確な認識をもつことが大切だと思います。移民あるいは難民の問題も、理想主義にのみ立脚するのではなく—それはときに大事ですが—、プラグマティックに「いま何が必要なのか」ということを考えていくことが重要です。たとえば移民について、私たちは「何かをしてあげる」立場にいるのではないのです。どうしても先進国に住んでいると、豊かな社会に暮らし「手を差し伸べる」とか、反対に「生活を脅かされたくない」という考え方になってしまいます。ですが、われわれの足下はそれほど確固としたものでしょうか。つまり、移民や難民が慈悲を受ける対象であるとか、われわれの生活基盤を掘り崩す存在であるという認識は、そうした豊かな社会にわれわれが生きているという認識を前提としています。しかし、それは本当なのでしょうか。（大規模な）移民なしに、われわれの社会や現在の生活は維持していけるのでしょうか。

私が、日本政府に不満なのは、議論のためのデータを出さないことにあります。イギリスでは、論争的な問題を議論する際、徹底的にデータを出します。移民を入れると、どういう問題があるのか。どれだけの規模だと安全で、どれだけの規模だとリスクが増すのか。歳入に対する貢献はどれだけで、歳出への負担はどれだけ増大するのか。少子高齢化のなかで、どれだけの移民労働力が、どの分野で必要なのか、など。それが、政府やさまざまなシンクタンクの報告書などを通じて、議論することができる。でも日本では、そうしたデータをオープンにしない。貧困問題もそうですが、データがない中で曖昧な状況で議論していく。だから、イデオロギー

的な議論しかできないわけです。一部の機関が人口予測をやっています
が、客観的なデータこそが、今後の日本のあり方を考える際の前提となる
べきです。

橋本 学生の方々には、繰り返しになりますが、わざわざ遠くの危険なところ
に行く必要はないということです。京都にもきつとたくさんの外国人が
いらっしやると思います。在日の方々も留学生も。日本政府がシリア難民
の留学生を受け入れるのとは別に、既に日本にいる難民の方々にUNHCR
が奨学金を出して日本の大学に通えるようにしたりしています。異なる
背景をもつ学生が、みなさんの隣でいっしょに勉強する、既に行っているか
もしれない。彼等と友だちになってみて下さい。「いま、ここにあるグ
ローバル」という題が、いいなと思いました。まさに「いま、ここにある
グローバル」という言葉を忘れずに、いっしょに勉強できたらいいなと思
います。

小久保 ありがとうございます。以上をもちましてすべてのプログラムを
終了させていただきます。本日の模様は、GR学部紀要『GR』の次号に
掲載されますので、ぜひごらんください。最後に実行委員会を代表してみ
なさまに感謝の意を述べさせていただきます。今回のグローバル地域文化
学会・学術講演会を開催するにあたり、貴重な時間をいただき、「いま、
ここにあるグローバル」のテーマのもとに講演を行い、質疑応答にも柔軟
に対応していただきました安達先生、橋本先生、ありがとうございます。
次に、準備の段階から実行委員に多様な面で力を貸して下さったグ
ローバル地域文化学部事務室のみなさん、本当にありがとうございました。
最後に本日足をお運びいただいた会場のみなさまに心から感謝の意を
表します。今後とも、みなさまからのグローバル地域文化学会へのご支
援、お力添えをよろしくお願い申し上げます。第7回グローバル地域文化
学会学術講演会「いま、ここにあるグローバル——日本から考える多文化
共生／難民」を閉会いたします。ありがとうございました。